

言語使用者における動機のあり方について

加藤 重 広

《キーワード：正の動機、負の動機、言語変化、動機の対立》

我々が日常の言語活動を行うとき、常にもっとも適切な表現が容易に見つかるとは限らない。特定の表現を用いたとしても、その表現で十分意を尽くしたと思わない場合もあり、またやむを得ずその表現を使う場合もある。本稿は、言語使用者が特定の表現を用いる動機について、相反する2つの概念で説明できることを示し、説明原理を提案するものである。

1. 正の動機と負の動機

特定の対象物を指示する際に使用可能な語形が複数存在することは日常的によくあることである。このような場合話者は特定の語形を選択して使用することになる。しかし、習慣上よく用いられてきた形式がそのまま使われ続けるとは限らない。廃用となり、別の形式に置き換えられることもある。これは、語彙や音声（超分節要素のレベルを含む）や音韻・形態だけでなく、語彙や語用の面に及ぶ変化も見られる。

新たな語形が生じるといった変化を引き起こす動機は、原則として、正の動機(positive motivation)と負の動機(negative motivation)とに二分して考えることができる。ここでいう、正の動機とは、《新しい形式（語形や用法）が必要とされているという判断によって、旧来の形式を用いず、新しい形式を用いる意思》のことであり、負の動機とは《旧来の形式（語形や用法）では不適切、あるいは、不十分だという判断によって、旧来の形式を用いることを回避するために、新しい形式を用いるという意思》のことでありと説明できる。前者は、新たな形式に積極的に移行したいという動機であるが、後者は、旧来の形式から離れたいという動機であり、新たな形式に積極的に移行しようという動機ではなく、その点で消極的な動機だとも言えるだろう。

以下で、どういう言語変化に適用可能なのか、また、どういう言語変種の複数存在が説明可能なのか、について検討することにする。

2. 表記選択における2つの動機

日本語の表記では、外来語をカタカナで、和語をひらがなで書く、おおまかな表記の原則があると見てよいが、この場合、外来語の表記ではカタカナを用いるのが無標の選択で、和語の表記ではひらがなを用いるのが無標の選択だということになる。逆に言えば、外来語をひらがなで表記することは表記上有標であり、有標の表記を選択するだけの理由が必要だと考えられる。ここで正の動機が機能すると、無標であるカタカナの表記よりも有標であるひらがなの表記の方がより適切だという判断があって、ひらがなでの表記を行うことになる。一方、負の動機が機能する場合には、カタカナによる無標の表記が適切でないという判断があって、いわば無標の選択を避けた結果としてひらがなによる有標の表記を行ったと言える。

たとえば、「コーヒー」や「メロン」のようにカタカナ表記が無標である語形について、「こーひー」あるいは「めろん」のように表記するのは有標であり、正の動機か負の動機かのいずれかに分類できる動機が介在していると考えられる。カタカナで書くべき語形をひらがなで表記するような場合の動機は、おおむね以下のように分類できる。

- 1) 通常の表記(規範的な表記)から逸脱したいという動機
- 2) カタカナの持つ効果を避けたいという動機
- 3) ひらがなの持つ効果を利用したいという動機

このうち、(1)は(2)を部分的に含みうるが、特定のなんらかの効果を回避しようとする場合を除外して考えると、おおまかにこの三分類が成立する。このとき、「ふつうの表記では人の目を引かないから」あるいは「標準的な表記とは違うものにして、新奇な雰囲気を得るため」といった理由があれば、それは(1)に分類できる。「カタカナで書くと無味乾燥な感じがするのを回避したい」という理由であれば(2)に分類され、「ひらがなで書いた方がやわらかい感じややさしい感じがするから」という理由は(3)の動機として分類できる。そして、(1)と(2)は負の動機に相当し、(3)は正の動機に該当することになる。

ひらがなとカタカナのような、2つの表記上の変種の選択については、比較的単純な二項対立(dichotomy)で検討することが可能である。しかも、このような場合、正の動機と負の動機が同時に介在すると分析することも可能である。つまり、Aという語形とBという語形の2変種の対立の場合は、Aという語形について《負の動機》が機能して、Aという語形の使用を回避すれば、それはBという語形の使用が無標であり、特に、Bについてもその使用を回避しようとする《負の動機》が二重に機能しない限り、Aに対する《負の動機》の発動はそのままBの使用を意味する。そこでは、明瞭な形で《正の動機》が機能しているわけではないが、《負の動機》と《正の動機》が結果的に対称的な機能を持つため、《正の動機》が介在すると見

ることができないわけではない。このように、2 変種を選択するような対立では正と負の2つの動機が疑似鏡像的対称性をなすため、一方の発動が他方の発動と同値であると見なす考え方も成立しうるが、ここでは一方の動機の発動が他方の動機の発動を自動的に意味するとは考えない。ただし、もう1つの動機が機能していると見るべき理由がある場合には、この限りではない。

しかし、漢字とひらがなとカタカナという三項対立(trichotomy)を考える場合は、《正の動機》と《負の動機》は独立して機能するものと見なすことになる。たとえば、「煙草」と「たばこ」と「タバコ」や「駄目」と「だめ」と「ダメ」のようなケースは、単純にどれかの使用を避けるという《負の動機》が一度だけ発動されても、最終的に使用する表記は決まらない。AとBとCの表記が同じような価値で存在しているとケースを仮定した場合、《正の動機》と《負の動機》は次のようなものが想定される。

- 4) Aの持つ表記効果を利用したいという《正の動機》
- 5) Bの持つ表記効果を利用したいという《正の動機》
- 6) Cの持つ表記効果を利用したいという《正の動機》
- 7) Aの持つ表記効果を回避したいという《負の動機》
- 8) Bの持つ表記効果を回避したいという《負の動機》
- 9) Cの持つ表記効果を回避したいという《負の動機》

《正の動機》が発動されるケースでは、(4)(5)(6)のいずれかが発動されれば、どの形式を選択するかが一義的に決定される。しかし、まず、《負の動機》が発動される場合には、(7)(8)(9)のいずれかだけではどの形式を選ぶかが一義的に決まらない。さらに、《負の動機》か《正の動機》かいずれか一方が続けて発動される必要があるのである。つまり、AとBとCという3つの言語形式が等しい資格で選択肢となっている場合には、①《正の動機》、②《負の動機》+《正の動機》、③《負の動機》+《負の動機》、のいずれかによらなければ、選択すべき形式を一義的に定めることができない、ということである。

むろん、理論的には3つの言語形式が全く等しい資格で存在していることは考えにくい。また、選択すべき言語形式が相当数存在することもあり得る。従って、実際の言語使用ではもっと複雑な判断がなされているのであり、実際の言語現象からさまざまな夾雑物を除外したレベルで想定される原理であることは考えておかななくてはならない。

3. 統語面における選択の動機

Kato, Shigehiro (1995) 加藤重広(2001)では、いわゆる形容動詞としての用法が話者の認

知に依存して決まるケースがあることを指摘している。たとえば、「有名」は「有名な作家」と連体修飾で「な」が現れる（この「な」を以下、連体ナ形と呼ぶ）ことが固定しており、「*有名の作家」という用法は一般に許容形とされない。これに対して、「無名」は通例、連体修飾において「無名の作家」のように「の」をとる（この「の」を以下、連体ノ形と呼ぶ）が、場合によっては、「全く無名人」のような形が許容されることがある。ここでは、連体ナ形と連体ノ形の意味差は、Kato(1995), 加藤(2001)の枠組みに従い、ある種の評価軸を導入して段階的な属性と見ている場合に前者、そうであるかないかを不連続的に評価しており、非段階的な属性と見ている場合には後者としておく。語彙によっては、一方のとらえ方しか許さないものもあるが、両方のとらえ方が可能な場合もあり、その場合には、選択に《正の動機》か《負の動機》が関わるということが考えられる。

10) 無名の兵士たち

11) 無名なタレント

「無名」は一般に連体ノ形をとることから、(10)のように用いるのが規範にかなった使い方である。これは無標の用法と言っているもので、通常は「名声を持つか持たないか」と捉えて「名声がない」という不連続な（非段階的な）評価を与えるわけである。これに対して、タレントのような人気商売では名声の度合いが想定可能であり、また、名声の度合いが重要な意味を持つことがある。このために、「無名」を「名声が高いかどうか、多いか少ないか」といった高さあるいは多寡という連続的な評価軸を導入して捉えているという説明ができる。この場合、(11)を「無名のタレント」という場合に、ある種の集合を表現している感じを避け、「無名のタレント」をいうカテゴリを設定して、名声を連続的な評価軸にしないことに、話者が抵抗や不適切さを感じているのだとすれば、それはそこで《負の動機》が発動したことになる。もしも、名声という評価軸で連続的に捉え、段階的な属性と見なすべきだという判断があるならば、それは《正の動機》である。

連体ノ形と連体ナ形の場合、ごく緩い二項対立が想定される。むしろ、「無名である」や「無名なる」などの形態が使用できないわけではないが、これは、むしろ連体ナ形と連体ノ形を選ばない場合のオプションと見るべきで、ナイーブなレベルでは「無名の」と「無名な」が存在していると考えべきだろう。とすれば、これらは先に見た二項対置の動機原則により、一方が他方を理論的に含みうる関係になっており、単純に一方の動機だけを排他的に指定することはできない。言い換えれば、連続的に評価したいという動機（連体ナ形を選択する《正の動機》）と不連続に評価したくないという動機（連体ノ形を選択しない《負の動機》）は表裏一体となっているところがあり、一方だけを切り離して考えにくいのである。

4. 語用論における選択と変化への適用

次に語用論の領域において、《正の動機》と《負の動機》をどのように適用できるかについて検討する。

近年、レストランや喫茶店などで給仕係が注文したものを出すときに「スパゲッティーになります」などのように言うことが増えてきている。これは、従来であれば「スパゲッティーです」もしくは「スパゲッティーでございます」のように言っていたものである。「Xになります」を用いる話者の心理には、「Xです」では、そっけない感じがあり、やや丁寧さに欠けるという判断があり、このことが別の表現を使うための《負の動機》になっていると説明することができる。この種の「なります」については、以下のような説明モデルを想定することが可能である。

「Xです」に対して品位の高い形式としては「Xでございます」などがあるが、これは古めかしく、やや過剰な品位があるという判断があり、《負の動機》が発動する。また、「Xです」に対しても、上で述べたように丁寧さが不足という判断から《負の動機》が発動する。これ以外の他の選択肢を想定することも可能であるが、その場合にも何らかの《負の動機》が発動して、それを用いるべきではないと見なされる。その結果、「Xになります」が残り、これには《負の動機》が発動されないの、いわば生き残った形式として使用されることになる。つまり、「Xになります」がより適切な形式であるという判断があり、それに基づく《正の動機》が発動したわけではない、ということである。もちろん、「Xになります」が規範的に適格なわけでない。しかし、正用である「500円になります」「お求めの品はこちらになります」などで頻繁に耳にする表現で、語用的適切性よりも、ポライトネス上の適切性が重視された結果選択された（その結果、用法が拡張した）と見るべきだろう。《正の動機》の発動結果ではなく、むしろ、《負の動機》がいくつか重なって一般化したと見るべき言語形式は他にもある。

例えば、飲食店などで「ご注文は以上でよろしかったですか」のように、タ形をつかう現象は各地で観察されるが、これも「よろしいですか」という言い方が確認を事務的に行うような冷淡できつい言い方に聞こえるという判断があり、この冷淡できつい感じを緩和するために「よろしかったですか」のようなタ形を利用するとも説明できる。この場合、「よろしゅうございますか」のようにすれば、品位が高くなり、丁寧度が増すのに伴って、きつい感じはなくなるが、これも古めかしくて、やや過剰な丁寧さが伴うという判断があり、若年層にとってこれは自分が用いるのにふさわしくないという判断があれば、そこではやはり《負の動機》が発動することになる。問題は、なぜタ形に丁寧さが伴うかということであるが、これは以下のような背景が考えられる。

12) 【ホテルのフロントで】「ご一泊でよろしいでしょうか」

13) 【ホテルのフロントで】「ご一泊でよろしかったですか」

これは、そのホテルに投宿することを事前に予約しているのであれば、(13)が使える。しかし、その場で(いわゆる飛び込みで)投宿の希望を述べたのであれば、それに対する応答としては(12)のように言うのが本来的には適当である。これは、(13)はすでに承った予約について確認を行っていることになるからで、(12)のように単にその場での発話の中で確認行為をしているのとは違うからである。後者は、いわばすでにホテル側は客として認知しており、そういう配慮を持って接しているというニュアンスが感じられる。夕形が(13)で用いられるのには、そういった状況があるはずなのであるが、単にこの効果を「夕形によって配慮を持っていることが表せる」という形で過剰に単純化してしまえば、その用法が過去に得た知識と照合することによる確認といった条件なしに、使えることになる。喫茶店などでの注文は予約というケースは通常は考えにくく、その場で注文することが多いので、過去に得た知識と照合しているわけではないが、夕形によって客に対する配慮が示せる(また、それによって丁寧度もあがる)と判断していることによって、この種の言い方が一般化したと見ることもできるだろう。これは、《正の動機》が発動したと見るべきケースになる。むろん、「よろございますか」が《負の動機》でブロックされなければ、こちらが用いられることになったことも考えられるので、両方の動機が順に適用されたと考えるほうが理にかなっている。

また、さきほどの「スパゲッティーになります」のような用法についても、他の動機が介在している可能性は否定できない。例えば、商店や飲食業など客商売の現場では、請求金額を告げる「1,233円になります」といった言い方が昔からあり、また、商品の説明などで「こちらが輪島塗の硯箱です」を「こちらが輪島塗の硯箱になっております」という場合もある。後者のケースは、「こちらが輪島塗の硯箱でございます」などに比べると、「私は詳しくはないが、あるいは、最終的な責任者ではないが、そういうことになっている」というニュアンスがあり、それが好ましい印象を作っていると感じる人もある。こう考えると、「になります」「になっています」がなじみのある表現であることから、「Xです」「Xでございます」について生じた《負の動機》によって、代わりに「Xになります」が拡張的に用いられるようになったと見ることが可能である。しかも、これには、「これがXということになっている。私が決めたのではなくて、もうそういうことになっている。だから、文句はいわないでもらいたい」という暗示や、やや責任を回避するニュアンスも伴っており、それが《正の動機》としても機能していると説明可能である。

5. まとめ

本稿では、言語形式の選択に《正の動機》と《負の動機》が関わっている可能性を指摘し、

それぞれの定義を与えた。さらに、これらをどう適用すべきかについて具体例とともに検討を行い、表記と統語と語用の3つの面について有効な説明が成立しうる可能性を提示した。この概念は、いまだ多くの洗練を要する段階であるが、さまざまな面において応用可能だと考えられる。例えば、井上史雄(1999)は、敬意の低減現象という用語で、敬意表現が用いられているうちに徐々に敬意が感じられなくなる現象を一般化しているが、これによってその敬語表現が用いられなくなるという現象が見られれば、これは「敬意が不十分である」という《負の動機》が発動したという説明が可能である。

適用可能な例はまだ多くあるであろう。しかし、説明が成立することと、それが社会言語学的な調査や心理言語学的な実験と合致するかはまた別の問題である。本稿は、このような研究に理論的土台となるものを与えたに過ぎないが、今後、理論的にも洗練化し、数値などによる実証を行うことで有効な分析装置としていくことを考えたい。

参考文献

井上史雄(1999)『敬語はこわくない』講談社

Kato, Shigehiro(1995) "On the Semantic Features of Japanese Adjectives" *Tokyo University Linguistics Papers*14 (Department of Linguistics, Faculty of Letters, University of Tokyo) pp. 681 - 697

加藤重広(2001)『日本語の修飾構造と品詞体系』ゼロックス・ブックパーク・東京大学大学院博士論文ライブラリー